

◇作品タイトル…蓮の花

◇著者名：Parade556

◇140文字以内のあらすじ…幸子と小幡は、大学時代に恋人同士だったが別れ、60年後、老人ホームで再開。老いらくの恋に、周囲は大慌てする中、ホームで開催されるダンス大会に、幸子は、学生の頃の最後の小幡との約束を思い出す。しかし小幡はダンス大会の前に亡くなってしまい、幸子はそのことを知らないまま当日を迎える。

◇登場人物表

土井幸子（82）（19） 特別養護老人ホ

ーム【そよ風】入所者

小幡圭史（83）（19） 幸子と同じ

谷口幸和子（49） 幸子の娘

与田百恵（52） そよ風のケアマネ

ジャー

筒井つらら（29） よそ風の介護職員

土井健太郎（89） 幸子の夫（遺影）

その他

介護職員

小幡の家族

（回想）デモ隊の若者たち

◇以下、本文

○上野公園・園内

【T・1961年 上野公園】

土井（旧姓・田沢）幸子（19）、池  
の前で立っている。

不忍池に蓮が並んでいる。満開。桃色  
の花が咲いている。

近くの通りをデモ隊が行進し、シユプ  
レヒコール。

デモ隊「ソ連の核実験再開、はんたーい」

小幡圭史（19）、現れる。

小幡「さっちゃん」

幸子「圭史さん」

二人、手と手を取り合う。

小幡「ごめん。すぐ行かないと」

小幡、デモ隊の方を見る。

幸子「今度はいつ会える？」

小幡「わからない。でも来週もココで待つて  
てくれるかい？」

幸子「はい」

小幡「満開の蓮の花の前で踊ろう。ね？」

幸子「はい」

小幡、笑顔で走り去っていく。

名残惜しそうにその背中を見送る幸子。

○同

【T・一週間後】

幸子、一人で蓮を見つめている。

○同（夜）

幸子、蓮の花を見ながら涙をこぼす。

○特別養護老人ホーム【そよ風】・中庭

土井幸子（82）、ベンチに座って池に浮かぶ数輪の蓮を見ている。まだ咲いていない。

○同・談話室

幸子の後ろ姿を見つめている谷口幸和子（49）と与田百恵（52）。

幸和子「うちの母、ご迷惑おかけしていませんか？」

百恵「いえいえ、そんな。何の心配もありませんよ」

幸和子「良かった。でも、ちよつとボケてません？」

百恵「あれくらいの年齢なら、自然なことです」

幸和子「はあ」

百恵「幸子さん。池が好きで、ああして毎日のように中庭に出たらっしやいますよ」

幸和子「ほんとに、良い終の棲家を見つけられました」

百恵「我々も精いっぱい、頑張ります」

幸和子、中庭につづく窓を開けると、

幸和子「母さん。帰るからね」

幸子「…」

幸和子「母さん」

幸子、振り返ると幸和子を見て笑う。

幸子「ああ。もう帰るの」

幸和子「まだボケないですよ。お願いだから」

幸子「ええ。そうね」

幸和子、笑いながらドアを閉める。

幸子、また中庭の蓮を見る。

#### ○同・中庭

幸子、ベンチを立ちあがると談話室へ。

玄関に、小幡圭史（83）とその家族の姿が。百恵たち職員が出迎えている。

幸子、すぐ小幡に気づき、あつとなる。

百恵「小幡様、ようこそお越しくさいます。どうぞこちらへ」

小幡は気づかない。小幡の家族に百恵や職員たちが頭を下げている。

幸子、逃げるようにエレベーターへ。

#### ○同・幸子の部屋

ワンルームの個室。

幸子、戻ると胸に手をあてて深呼吸。

左腕にスマートウォッチをはめている。

筒井つらら（29）、入室。

つらら「幸子さん大丈夫？」

幸子「え？」

つらら「すごい心拍数あがってたから」

幸子「大丈夫、大丈夫よ」

つらら「良かった。またなんかあったら呼ん

でくださいね」

幸子「はい。ありがとう」

つらら、出ていく。

ベッドの脇、土井健太郎（89）の遺

影の前に立つ幸子。

幸子「お父さん：ごめんなさい。どうしよう」

幸子、遺影に頭を下げる。

### ○同・談話室

幸子、一目を気にしながら歩いている。

談話室の隣の食堂に小幡の姿。

幸子、逃げるように中庭へ。

### ○同・中庭

幸子、ベンチに座り蓮の花を見ている。

小幡、現れる。

小幡「さっちゃん？」

幸子、振り返る。小幡を見つけて、あ、  
となる。

小幡「さっちゃんだよね？」

幸子「わかるの？」

小幡「わかるよ。もちろん」

幸子「もう、こんなおばあちゃんになっちゃ  
ったから」

小幡「ぼくも、爺さんだよ」

幸子「そんな…」

小幡「隣、いいかい？」

幸子「え、ええ」

小幡、幸子の隣に座る。

小幡「いつから、こちらに？」

幸子「1カ月前」

○同・談話室

百恵、幸子と小幡の姿を見ている。

つらら、通りかかる。

つらら「新しく入った小幡さんですか？」

百恵「…」

つらら「なんか、知り合いっぽい感じで」

百恵「はじまらないといいけど…」

つらら「老いらくの恋」

百恵「厄介なのよね。はじまっちゃうと」

つらら「大丈夫ですよ。きっと」

百恵「ちよつと、気をつけていこう」

つらら「はい」

○同（別の日）

雨の日。

幸子、中庭につづく窓の前に立っている。そこへ小幡がやってくる。

二人、並んで喋っている。

百恵、二人のことを見ている。

○同・面会室（また別の日）

幸子と幸和子、喋っている。

幸和子「母さん。聞いてる？」

幸子「え？何？」

幸和子「ひかるがアイドルのオーディション受けるの」

幸子「あ、そうなの」

幸和子「受かるかわからないけどね」

幸子「そうなの。そうね」

幸和子「あ、それから父さんの本、捨てちゃっていいわね？」

幸子、中庭の方を見る。

小幡が誰かを探している。

幸和子「（小幡には気づかず）ちよつと、聞いてるの？母さん」

幸子「はいはい」

幸和子「父さんの本。捨てていいわね？」

幸子「いいわよ。私は何にもわからないもの」

幸和子「私だってわからないわよロシア文学なんて」

幸子、またよそ見しようとするのを、  
幸和子「母さん。こっちが話してるんだから

ちやんと見てよ」

幸子「はいはい」

幸和子「ほんと。ボケないでよ。まだ」

幸子、嫌な顔をする。

○同・玄関

幸和子、エレベーターに乗る幸子を見

送る（中庭に小幡の姿はない）。

百恵、幸和子の前に現れる。

百恵「谷口様。ちよつとよろしいでしょうか」

幸和子「え？はい」

百恵「少しだけ、気になることが…」

幸和子「え？母に何かありました」

○同・エレベーターホール

2階で開くと、そこに小幡の姿が。

幸子「あ」

小幡「面会？」

幸子「ええ」

小幡「ぼくもだよ。案外疲れるね」

幸子「そうね」

小幡「それじゃ」

二人、笑顔ですれ違う。

○同・面会室（別の日）

幸子、幸和子に責められている。

幸和子「不潔よ。不潔」

幸子「そんな言い方しないで」

幸和子「色恋なんて。情けない。もう80過

ぎたババアなのよ」

幸子「そんなのわかってるわよ」

幸和子「相手、入ったばかりの人みたいじ

やないの。誰なの？」

幸子「知り合いなの。昔の」

幸和子「前の恋人だったとか？」

幸子「…」

幸和子「はあ。情けない。ほんとに情けない。

父さんにも失礼よ」

幸子「…わかってるわよ」

幸和子「母さんがそんなふしだらな人だと思

わなかった。こんなことなら、施設を変えますからね」

幸子「え？」

幸和子「ほんと最悪よ」

幸和子、立ちあがると去っていく。

幸子「待って幸和子。待って」

幸子、立ちあがろうとして足を挫く。

幸和子「母さん。大丈夫？」

幸和子、慌てて幸子に駆け寄る。

幸子「（泣きながら）母さんのこと、そんな  
いじめないですよ。母さん、家族のために尽  
くしてきたじゃないのよ」

幸和子、周囲の目を気にしながら、

幸和子「わかった。わかったから。もう。や  
めてよ。母さん。私が虐めてるみたいじゃ  
ないのよ」

つらら「大丈夫ですか？幸子さん」

つららや施設職員が駆け寄ってくる。

幸和子「あ、母。足を挫いちゃったみたいで」  
つらら達、幸子を介抱する。

○同・玄関

掲示板に貼られた入所者ダンス大会のポスター。

○同・医務室

幸子、つららから治療を受けている。  
つらら「ダンス大会は無理かもね」  
幸子「え？」

○（回想）ダンスホール・館内（夜）

60年代のダンスホール。  
踊る若者たちの中に小幡と幸子の姿。  
そこへ警察がガサ入れ。

小幡「さっちゃん。こっち」

小幡、幸子の手を取って裏口から逃げる。

○（回想）不忍の池（夜）

幸子と小幡、笑いこぼるようにして

池へ。

蓮の花はまだ蕾の段階。

幸子「まだずっと先かな」

小幡「蓮？」

幸子「そう。満開になると綺麗なの」

小幡「さっちゃん。踊らない？」

幸子「え？」

小幡「さ、踊ろう」

幸子「はい」

二人、手を取り合い、チークダンスを踊りはじめる。

○元の医務室

幸子、つららに対して感情的に、

幸子「踊りたいの」

つらら「幸子さん。でも」

幸子「怪我、治すから。お願い。お願いしま  
す」

○同・スタッフルーム（夜）

幸子の部屋からアラーム。

○同・幸子の部屋（夜）

幸子、転倒している。つらら、現れ、

つらら「幸子さん。何してるの」

幸子「練習、ダンスの」

つらら「無理だよ。ダメだって」

幸子「でも。頑張らないと」

つらら「幸子さんってば」

○同・面会室

幸和子と向かい合って座る百恵とつらら。

百恵「と、言うことなんです。申し訳ございません」

幸和子「母は、決してふしだらな人間じゃありません。ほんとに、家族のために、尽くしてきてくれました」

百恵「ええ。存じ上げてます」

幸和子「私、どうしたら…」

百恵「小幡さんのご家族にも、話をしようと思っっています」

幸和子「そうですか。わかりました。でも母が悪いか」

つらら「どっちが悪いとかじゃないでしょ」

幸和子「…」

つらら「あ、すいません。一般的に」

百恵「私もそう思います。ご安心ください」

3人の視界の先に幸子。中庭に出ていく。

池の前のベンチに座る。

その背中に視線を送る3人。

幸和子「母の、したいようにさせてあげたいです」

百恵「え？」

幸和子「父のことで、母も、すごく苦勞したから。典型的な九州男児で」

○同・幸子の部屋

健太郎の遺影。

○同（夜）

幸子、健太郎の遺影の脇で必死に練習している。

窓の外に救急車のサイレン。施設の前で停止。

幸子、必死に練習している。

○同・1階の玄関フロア（夜）

ストレッチャーに乗せて運ばれていく入所者。

小幡である。

○同・中庭（朝）

幸子、希望を込めた眼差しで、池に咲く満開の蓮の花を見ている。

○同・玄関フロア（朝）

つらら、その背中を気の毒そうに見る。  
百恵が通りかかり、

百恵「言う必要ないからね」

つらら「…はい」

百恵「他の入所者のことは、伝える必要がないんだから」

つらら「わかってます」

○同・食堂（夜）

T・「ダンス大会当日」

テーブルは片付けられ、ダンスフロアが出来上がっている。

○同・幸子の部屋（夜）

幸子、鏡の前で髪型を直している。そして口紅を塗り、少し足を引きずりながら部屋を出ていく。

○同・廊下（夜）

他の入所者たちも各々の個室から出てくる。

他の入所者「うわ、幸子さん。いつにもまし

て綺麗ねえ」

幸子「そんなことないわよ」

○（回想） 不忍池（夜）

幸子と小幡、チークダンスを踊っている。

○同・エレベーターホール（夜）

幸子、うきうきした顔でエレベーターを待っている。

○同・食堂（夜） 幸子の妄想

幸子、足を引きずりながらも参加。

小幡と幸子、だんだん近づいてくる。

そしてついに二人が手をつなぐ番。

幸子、足を引きずり小幡の前へ。

小幡「さっちゃん、大丈夫？」

幸子「もうおばあちゃんだから」

幸子、幸和子のことを気にする。

小幡「ぼくのことだけ見て」

幸子「え？」

小幡「ぼくのことだけ見ていて」

幸子「はい」

小幡、幸和子に隠れ悪戯つぼく笑う。

そして二人、手をつなぐ。

○（妄想戻り）元のエレベーターホール（夜）

エレベーターが着く。

幸子、乗り込んでいく。

○同・中庭（夜）

池に浮かぶ蓮の花。強い風に揺られ、

花びらが池に散り、水の重みで沈んで

いく。